



王であるキリスト (ルカ 23:35-43)

遠巻きにはではなく、イエスと向き合って

王であるキリストの祭日、年間の最後の週を迎えました。私たちは日本に来られた教皇様と一緒に祝う祭日となりました。教皇様を迎えることは、王であるキリストの代理を迎えることでもあると思いますので、少し関連付けて話そうと思います。

今週の説教は、聖週間の聖木曜日、聖金曜日くらいの短い説教となりますことをお許してください。教皇様のミサに参加するために、長い説教をしてはられないという事情があります。よりコンパクトに、伝えたいことを伝えるように努力します。

福音朗読は、よく考えられています。「議員たちも、あざ笑って言った。」(23・35) 最初に侮辱するのは、民衆と共に遠くで十字架のイエスを見つめている議員たちです。次に侮辱するのは兵士たちです。彼らは槍でイエスを突ける近い場所にいます。そして最後にイエスを侮辱するのは、一緒に十字架にかけられていた犯罪人の一人でした。

この描き方はよく考えられています。遠くから侮辱する人、近くで侮辱する人、目の前で侮辱する人です。距離だけで描き分けているのではありません。遠くの議員たちは指導的立場にある人、近くにいた兵士たちは一般人、目の前にいるのは犯罪人です。近くなるほど侮辱は甚だしく、近づくと罪深いとされた人がいるという描き方です。

ところが最も近くにいて、まったく正反対の態度を示した人がいました。もう一人の犯罪人です。彼もまた、罪深いとされた人でしたが、イエスに誰よりも近づいたことで、罪深さを認め、運命をイエスに委ねる回心に導かれたのです。「イエスよ、あなたの御国においでになるときは、わたしを思い出してください」(23・42)。王であるキリストの前に自分をさらけ出した時、誰よりも早く回心の道が開けたのです。

さて私たちは、長崎で教皇様のミサに参加します。私たちが陣取るのは指定された場所です。恐らくそこから動くことはできず、教皇様に近づきたくても無理なのです。けれども福音の学びから、いちばん近い場所に行き、王であるイエスの代理者である教皇フランシスコに照らしと導きをいただき、神へと心を開いてもらうことは可能なのです。

十字架のイエスに最も近くいたのは、罪人とされた人でした。実際に、最も激しくののしった人でした。私たちが教皇フランシスコの熱意に比べればどれだけ生ぬるい信者であるかは明らかです。これまでの宣教への熱意の無さや、信仰を燃え立たせる努力の不足を嘆き、神に心を開いてへりくだるなら、指定の場所にながら、心は教皇フランシスコの目の前に行くことができると思うのです。その時私たちは、新しい熱意を頂いて、新しい宣教に向かう力を得るのではないのでしょうか。

もはや時間は残されていません。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ」(23・39)と教皇様に言いますか? 「イエスよ、あなたの御国においでになるときは、わたしを思い出してください」と言いますか。これから数時間のうちに、自分で決めてください。